

本部ニュース 129 号より

Bulletin 129 “The Secret of the Reformation”

By Armin Bachor, Director of Evangeliumsdiener für Israel (EDI)

宗教改革の奥義

EDI ディレクター アーミン・ベーカー

翻訳：駒井洋子

「宗教改革の奥義」とは？



まず第一に、私は宗教改革の奥義について語るには全くふさわしい者ではないと思っている。何から何まで説明できる者は、結局何も理解できていない、その隠された基本的な重要性さえ分かっていないということを暴露してしまう。私はそのようなことにはなりたくないと思う。

第二に、宗教改革についての私の個人的な考えを述べたいと思うが、ほんの小さな断片しか考察できていないことを私自身が良く知っている。私は、幼年時代にはルター派経験主義の世界で育ち、後には、さらなるルター派神学の世界の中で生活してきた。そのためルターによる宗教改革についての側面について少しならば気持ちよく語るができるだろう。どうか私の「視野の狭い」

アプローチをお許し願いたく思う。

さあ、宗教改革の秘密を明かす冒険に飛びこもう。なぜ宗教改革がこれほど強力な大事件となったのであろうか？ 500 年経た今でさえ我々はこれについて語るのはなぜか？ とにかく宗教改革は、今まで世界を変えてきたのである。

1. 友を得て、世界を変えよ — 相補的ミニストリーの原則

マルチン・ルターには多くの敵がいた。私たちはそのことを良く知っている。また、教会や政治世界に多くのパトロンや知人もいた。しかし、親友と呼べる者はただ一人であった。彼の名は、フィリップ・メランヒトン、ドイツ語ではシュヴァルトツェアトと言われ、その意味は「黒い地」という。彼のドイツ語名は、ギリシャ語のメランヒトンから転用したものだ。

理解しやすくするため、以降、二人をフィリップ、彼の親友をマルチンと呼ぶことにする。二人は、個人的には非常に近い関係であったが、性格は全く異なっていた。マルチンはメランヒトンの『ガラテヤ注解書』（1529年）の序文にフィリップについて下記のように記した。

「私は、烏合大衆やろくでも無しと戦ってきた。そのため、私の本はたいへん好闘的だ。私は、道を切り開く粗野な開拓者だ。しかし、神はフィリップに豊かに賜物を与えている。彼は、優しく穏やかにやって来て、蒔き、心をこめて水を遣る。」

マルチンは戦士で、フィリップは調停者だった。マルチンは信仰の強さの良い例であり、革命的先見者であった。他方、フィリップは、慎重さと自制が身をまとった者で、中庸を具現している。彼は、良心的、協調的ピースメーカーの優れた性質を与えられていた。

マルチン・ルターは、時たま、何もかも複雑にしてしまうが、フィリップは、カオスを再構築し、思考や神学を新たに形態づけ、物事の順を再生する。彼は、物事をリフォームする。

マルチンとフィリップの二人は、宗教改革という共通の仕事に関わっていた。しかし、彼らはささやかな違いに固執していた。私が思うに、それでも相補的に聖書解釈に臨んでいた。マルチンとフィリップの違いは、フィリップに宛てたマルチンの手紙（1530年6月）によく現れている。

「君を軟弱にしている大きな不安に対して、私は心をこめて、反対を唱えよう。この仕事は自分たちのために始めたのではないからだ。まるで君の無益な心配が何かを成し遂げるかのように、君を苦しめているのは君の哲学で、神学ではない。この仕事は大衆のためにということに関する限り、私は大変満足をしている。なぜなら、それは正しいことであり真理で、おまけにこれは、キリスト、神ご自身から出たことなのだから。だから、僕は単なる傍観者なのだ。もし、私たちが失敗すれば、キリストも倒れ、彼が失敗するなら、皇帝と立つより、むしろキリストと共に倒れるほうがまだからだ。」

マルチンは、民衆への強力な説教者で、フィリップは学徒への思慮深い教師だった。フィリップは、ルターの考えを体系的に整え、公にそれを擁護した。彼は、ルターの考えを宗教教育のために、体系化し手引書とした。以来、フィリップは「ドイツ国の教育者」と称されている。リベラル・アーツ・カレッジは今までもメランヒトンのアイディアに沿ってカリキュラムを組むようにしている。宗教改革の奥義の一つに、これら二人の強力な相補的ミニストリーがある。神はマルチンを召し、賜物を与え、送り出した。同様に、フィリップを召し、マルチンの側に置いた。

神はこのようなことを以前にも成された。モーセの側にアロンを置かれた。モーセは神のマイクロフォンで、アロンは民衆への拡声器だった。同じように、神はダビデを召し、その側にヨナタンを置かれた。それは、犠牲と忠誠の交わりだった。神はナオミを召し、その側にルツを置かれた。それは、備えと保護の交わりだった。神は使徒パウロを召し、その側にバルナバを置かれた。それは、パウロが話し、バルナバは物事を調停した。もし、神があなたに世界を変えるように使命を与えていると感じるならば、我々はみな、このように思うべきだが、あなたの側に置かれている友のために祈るべきです。あなたは、今の世界を変えたいと思うだろうか？ 友を得て、世界を変えなさい。

2. 「光よあれ」 — 福音の再発見

中世、「暗黒時代」へさかのぼってみよう。この世紀は、実に暗い時代だった。一般市民が教育を受けることはなく、圧倒的多数の人々は読み書きができなかった。中世の教会では、基本的に聖書はなく、説教は一般市民が聞き、理解できる言語で語られるものではなかった。実に、「無知無学な時代」だった。

しかし、広大な闇の中に、一つの灯台があった。それは、ユダヤ教であり、シナゴグだった。ユダヤ教はすべてを備えていた。ヘブル語聖書、ヘブル語、啓示・真理の源泉、信仰と倫理の基盤など。シナゴグは、一般の人々に教育を受けるチャンスを提供する知的啓蒙と霊的育成の灯台だった。読み書きはすべての人のためであって、修道院に入り教会によって教育される選ばれた名士だけのものではなかった。

一方、ユダヤ人は、何世紀にもわたって高慢な教会によって貶められ、抑圧されてきた。他方、神の助けによって、「選ばれ、神から愛されている民」（ローマ 11:28）として、「神の賜物と召命は変わることがない」（ローマ 11:29）ゆえに、ユダヤ教は、暗黒時代の間、大衆にとって真の啓蒙の唯一の場として存続してきた。教会のある者はこれを評価した。

1517年

時は1517年。聖書的真実、福音は広く理解されておらず、目で認識できるものでもなかった。福音は、教会の伝承と迷信で覆われていた。アウグスチヌスの恩寵の神学はアリストテレス哲学とスコラ学によって、世にはびこっていた。その上、大衆が読み、理解することが出来る言語で書かれた聖書は存在しなかった。

マルチン・ルターは福音を発見したのではなく、それを発見したのでもない。彼は、再発見をしたに過ぎない。神学の教授である彼は、ただキリストによってのみ受け入れられる神に信仰を向けた時、福音の力に圧倒され、ルターの心は神の恩寵に捕われてしまった。彼は個人的に、恵みの力

による霊的解放を経験し、それを公に宣言した。混じりけのない福音を発見したルターは、人々に福音を知らせるべく活動を起こしたのである。

ある意味、神の靈感で書かれた権威あるラテン語聖書をよそに、フィリップは、ルターに新約・旧約聖書をドイツ語に翻訳するよう助言をした。フィリップは、ルターが旧約聖書のドイツ語訳をする際の重要なアシスタントだった。ユダヤ・バーチャル・ライブラリーは下記のように述べている。

「旧約聖書を翻訳するにあたり、ルターは助けが必要だった。彼は、ユダヤ人学者に助言を求めた。特に、偉大なキリスト教徒の碩学メランヒトンは助けとなった。ルターは、フランス人学者ニコラス・デ・ライラの注解を幅広く用いた。ライラは、ラビ・ラシの注釈をほぼ逐語訳をしたという。ルターは、しばしばライラから引用したため、次のような二行連句がよく知られることになった―「ライラが演奏しなければ、ルターはダンスができなかつたろう。」

聖書の翻訳のため、ルターはユダヤ教から知識を引き出した。彼は、ユダヤ教の知的啓蒙と霊的育成の光明に何か価値を感じていた。聖書翻訳によって、ルターは福音の覆いを取り除き単純な福音に光を当てた。そのため、すべての人が福音を知ることができるようになった。10年の間に、新・旧約全聖書は8版を重ね、ドイツ人家庭の10家族のうち1家族はドイツ語新約聖書を置いていた。結果として、聖書翻訳は、すべての人が教育を得るきっかけと、学校の建設をうながした。

それに加えて、教会の教理や教えは、聖書の言葉に照らし合わせることができるようになった。ユダヤ人についての虚偽、反ユダヤ主義論争などは、聖書の明白な記述によって看破され、退けられた。ドイツ語訳聖書は、偏見のない調停の物差しであり、その後のルター自身の反ユダヤ主義的誤解やユダヤ人に対する論争にも正しい判断を下すものだった。

ルターによる福音の再発見は、「暗黒時代」の終わりに新たな光と希望を生み出した。

3. 福音（ユーアンゲリオン）と福音伝道(エヴァンジェリズム) — ルターと福音とユダヤ人

ルターは福音を再発見した。ローマ書1章16～17節は、いわゆる「宗教改革節」といわれる。

「私は福音を恥とは思いません。福音は、ユダヤ人をはじめギリシャ人にも、信じるすべての人にとって、救いを得させる神の力です。なぜなら、福音のうちには神の義が啓示されていて、その義は、信仰に始まり信仰に進ませるからです。『義人は信仰によって生きる』と書いてあるとおります。」

この2節は、一方では福音の本質と目的を、他方ではそれを宣言するという挑戦を素晴らしく編み合わせている。しかしながら、この福音のメッセージと福音的命令の二つの特徴をとともに保ち続けるということは大変なことである。福音の力は、自身の福音伝道にではなく、福音そのものに内在するものである。ルターもまた、福音はギリシャ人、すなわちユダヤ人以外の人々だけのものではないことを知っていた。彼は、彼自身のユダヤ人に対する態度を変えるよう自分自身の宗教改革によって挑戦を受けていた。ルターのその時代では、ユダヤ人はヴィッテンベルクのような小さい町には住んでいなかった。彼は、ほんの数人のユダヤ人に会っただけで、シナゴグにも行ったことがなかった。福音の再発見と共に、ルターは、ユダヤ人が神に愛され選ばれ、メシアについての福音を信奉すべく召された民であることを再発見していた。

彼が個人的に福音に遭遇した数年後、ルターは、「キリストはユダヤ人であった」という見解を発表し、キリスト教会に衝撃を与えた。ある者はそれを知っていたが、そのことをカトリックの只中で発言することは許されなかった。彼の1523年の小論には、「イエス・キリストの出自はユダヤ人である。」と書かれており、ルターは圧制的なカトリック教会の下にあるユダヤ人の宿命をもう一度再考するようローマ教皇と教会に促した。

下記のように彼は自身の小冊子で主張した。

「我々は、ユダヤ人を人間というより犬のように取り扱った…彼らが洗礼を受けると、キリスト教の教義や教会生活を教えることは無く、ただ、カトリックであることに服従させ、あざけりの対象とした。もし、あの使徒たちが、彼らもユダヤ人であったが、我々を異邦人として取り扱い、我々異邦人も彼らをユダヤ人として取り扱っていたなら、異邦人の中にキリストの存在は皆無であったらろう…もし我々が(キリストとして)立場を誇るとき、我々は単なる異邦人であり、一方、ユダヤ人はキリストの血統に繋がっているということを覚えなければならない。我々は、異国人であり、義理の立場であり、彼らは、主の血の繋がった親戚であり、従姉妹であり、兄弟なのである。であるから、もし自身を誇る者がいるなら、ユダヤ人は我々よりキリストにはるかに近いのである…もし我々が本当に彼らを助けたいと思うなら、カトリックの法規に沿ってではなく、キリストの愛の法に沿って彼らと接するよう導かれなければならない。我々は、真心をもって彼らを受け入れ、共に商売をし働くことによって、彼らはキリスト教の教えを聞き、信仰生活を目撃する時と機会が与えられるようになるであろう。」

この論文の第二部において、ルターはナザレのイエスが約束のメシアであることを立証しようとした。彼は、神が他の国にではなく、ユダヤ人にトーラと預言の恵みを与え、栄誉ある立場を与えたと強調した。

結局、ルターは、教育的段階を追って説教をするよう奨励した。まず第一に、ユダヤ人が、人間イエスは真のメシアであることを知る。その後、イエスは、また真の神であることを教えられ、神が人間でありえないという彼らの偏見を克服するということである。

おそらくルターの説教により 1519 年に洗礼を受けた、元ラビのヤコブ・ギファーは、その後ヴィッテンベルクでヘブル語を教え、ルターが小冊子『イエス・キリストはユダヤ人として生まれた』を著すのを助けた。両者の目的は、ユダヤ人が社会に取り込まれて、より効果的に回心することだった。ルターは、ユダヤ教、ユダヤ人そのものに明確な霊的、文化的固有の価値をなんら見いだしていなかった。ルターは、ユダヤ人は、教会の「絶対的立場」に関して「消極的役割」を果たしたというアウグスチヌスの恩寵の神学に固執していたのである。

ルターの切なる願いは、ユダヤ人が彼の論文にはっきりと述べられている福音を聞き、読んでキリスト教に回心することであった。さらに、福音的活動によって、彼の宗教改革の真実が、カトリック教会の教義に対して、聖書的に正しいことを証明したいと望んでいた。彼のこの過度な期待は、後にルターを大きく失望させ、ユダヤ人に関する彼の考えにおいて過激な変化を起こす原因となった。

このようにしてルターは、彼の宣教の動機を福音の前面に置いた。彼は、宣教の動機が「福音の力」そのものを妨げる可能性があるとは考えなかった。ルターは、「福音(ユーアンゲリオン)と福音伝道(エヴァンジェリズム)」を混合していた。彼は、福音的成果に対する強い野心によって福音のメッセージをあいまいにさせていた。彼は、熱狂的な動機によって再び福音の内在する力を覆ってしまい、結果として、ユダヤ人の心に届く力を妨げてしまうかもしれなかった。ルターは、彼の福音的動機をより広い聖書的視点に正しく据えることに失敗した。一方、使徒パウロは、彼の同胞ユダヤ人の心を頑なにさせる秘訣をなぜか知っており、ユダヤ人シナゴグが起こすであろう最小限の結果を予想していた。

「そこで異邦人の方々に言いますが、私は異邦人の使徒ですから、自分の務めを重んじています。そして、それによって何とか私の同国人にねたみを引き起こさせて、その中の幾人でも救おうと願っているのです。」(ローマ 11 : 13)

パウロは、少なからず彼の履歴からみても、神の選びの民に対する愛ある忍耐を深く理解しており、それに応じて、ユダヤ人に対する彼自身のミニストーリーにおける態度を具体的に示していた。定期的にシナゴグを訪れ、同胞を救うことができるかもしれないと気づいていた。

結論

ルターの宗教改革は我々の目の前に挑戦すべき課題を掲げている。

1. 友を得て、世界を変えよ — 変えるためにチームを組め！

一人で歩き回っても、あるいはチームの一人であっても、世界を変えることはできない。個人的相補ミニストリーに取り組みなさい。あなたの側に心を共にしてくれる友人を祈り求めなさい。

2. 「光よあれ」 — 新しい方法で福音を伝えよ！

新たに、恵みのみに捉えられよ！新しい方法・冒険を見つけ、福音の真実と純粋な光を伝えよ！

3. 福音（ユーアンゲリオン）と福音伝道（エヴァンジェリズム） — 神はお出来になる！

ユダヤ人に接するとき、福音の力と、あなたの善意ある動機・強力な行為とを混同してはならない。福音それ自体は、常に善意の福音的動機と明確に区別されなければならない。福音は力を持っている。力があるのは、我々の福音を伝達する方法にあるのではない。いつも次の事を心に覚えていよう。

「彼ら（メシアをまだ拒んでいるユダヤ人）であっても、もし不信仰を続けなければ、つぎ合わされるのです。神は、彼らを再びつぎ合わすことができるのです。」（ローマ 11 : 23）

神は可能である。Elohim yakol（ヘブル語）神は、無類の忍耐を持ち、ご自身の選びの民の心に届くため、忍耐深く、そして大きな力をお持ちである。エロヒム・ヤコール=神は可能である。これこそが宗教改革の奥義である、

Armin Bachor
bachor@evangeliumsdienst.de